ザ・ドラえもんズ　時空を超えた聖なる少女達

工藤太一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ザ・ドラえもんズ　時空を超えた聖なる少女達

【Ｎコード】
Ｎ４６１１Ｓ

【作者名】
工藤太一

【あらすじ】
星の魔法使い・木之元さくらと聖女の転生者・日下部まろんは家族旅行で朝鮮に来ました。その最中にドラえもん・ドラミ・ドラパンの３人が彼女達を訪れてきました。２２世紀の東京でセワシやミミたち１０代の子供達がはぐれ悪魔に浚われたのです。彼女達は世界と未来と子供達を救うために２２世紀に向かいます。
一方、親子で香港に来た稚空は石にされた人々を目の辺りにします。フィン・月・ケルベロスの知らせを受けた彼は小狼を連れて彼女達を追って２２世紀に向かいます。

ドラえもんズ・カードキャプターさくら・神風怪盗ジャンヌの真のクロスオーバーがスタートを迎えます。

ドラパン登場（前書き）

さくらちゃん達の時空の冒険が始まろうとしています。今回はドラえもんズのみんなとの活躍が公開します。今回はドラパンも一緒です。

さくらちゃんとまろんちゃんの名コンビシーンが語られます。もしかしたら、知世ちゃんや都ちゃんも同行するのかもしれません。

今回はどんな衣装を着せられるのでしょうか。

ドラパン登場

２０世紀末の１２月末の東京。ドラえもんはのび太の部屋でいつもみたいにドラミと口論をしています。

「ドラミのケチンボ！メロンパンぐらいで怒ることはないだろう！」

「何よ！お兄ちゃんだって、この前はドラ焼きの１個や２個で大騒ぎしてたでしょう！」

兄妹ケンカは下のテレビの部屋まで響いています。ママはテレビを見ながら御煎餅を頬張っています。そこへ御遣いから帰ってきたのび太が帰ってきました。

「只今。あれ、どうしたの？」

ママは渋い顔をしながら上を指差しました。２階からドラえもんとドラミの言い争いが響いています。

「ドラミちゃん、来てたんだ。」

「そうなのよ。のび太何とかして頂戴。」

「判った。」

のび太は大急ぎで２階に駆け上がりました。

のび太は部屋に入ってくると。ドラえもんとドラミが背を向けています。その傍らにメロンパン２０個近くが入った袋が置いてあります。

「ドラえもん、ドラミちゃんどうしたの？」

「聞いてよ。のび太さん。お兄ちゃんたら私のメロンパンを２つも食べたのよ。」

「お前だってこの前はお兄ちゃんのドラ焼きを２つも食べただろうが~~~！」

「いいじゃないの！そのときは２０個もあったんだから！」

「メロンパンだってそうだろう！」

「メロンパンとドラ焼きは別！」
「鬼！悪魔！ケチンボ！」
ドラえもんはドラミを怒鳴り散らしました。さすがに怒ったドラミは・・・。
「お兄ちゃんの馬鹿！もう顔も見たくないわ！」
ドラミはメロンパンの袋を持って机の大きな引き出しの中のタイムマシンに飛び乗ろうとしました。更に。
「べ～～～～だ！」
ドラミは兄に舌を突き出します。
「い～～～～だ！」
ドラえもんも負けずに妹に噛み締めた歯を見せます。ドラミはタイムマシンに乗っていってしまいました。
「ああ、ドラミちゃん！」
「いいんだよ。あんなの。」
ドラえもんは拗ねた口調です。のび太はそれを取り成します。
「そんな言い方はないよ。確かに食べ物の恨みは怖いよ。だからと言って何も怒らなくてもいいじゃないか。」
「よくないよ。のび太くんは黙ってて。」
「ドラえもん。僕はドラミちゃんもドラえもんも大好きなんだから、ケンカはしないでもらいたいな。２人は仲違いされると僕は悲しいよ。」
のび太の熱意にドラえもんはとても可愛そうに思いました。
「判った。ドラミに謝ってくる。」
ドラえもんはタイムマシンに乗ってドラミを追いかけました。
２２世紀ではドラミがメロンパンを抱えながらセワシの家に帰宅しました。
「ちょっとセワシさん。聞いてよ。」
しかし、肝心のセワシの姿はありません。
「あれ、いない。何処にいったのかしら・・・？」

ドラミはセワシの行方を家の中で追いました。しかし、彼の姿は何処にもありません。
「もう、一体何処にいったのかしら？」
最後にセワシの部屋を調べてみました。するとどうでしょう。
「何これ！？部屋が嵐の形跡になってるじゃない！」
確かにセワシの部屋は泥棒に入られたように部屋が散らかっています。
「一体、誰がこんなことを！？雅か誘拐じゃないでしょうね！？」
ドラミはセワシの部屋を調べ回りました。その時、タイムホールの音がして、続いてドラえもんの声がしました。
「お兄ちゃん！？」
ドラミはドラえもんの気配を感じると廊下で合流しました。ドラえもんは泣きながらドラミに謝りました。ドラミもケンカのことを詫びてセワシがいなくなったことを話しました。ドラえもんはさすがに大慌てです。
ドラミは兄をセワシの部屋に連れて行きました。この有様を見たドラえもんは吃驚しました。
「確かに泥棒が入ったような後だ・・・。」
「でしょう。これは一体？」
セワシの部屋の窓を誰かが叩きました。二人は窓を外をよく見ると、ドラえもんの友人の一人がマントで空を飛んでいます。義賊のドラパンです。
「「ドラパン（さん）！」」
ドラパンは通り抜けスープを出してセワシの部屋に入ってきました。
「久しぶりだな。ドラミ、ドラえもん。」
「こちらこそ。」
「ねえ、ドラパンさん。セワシさんがいなくなってしまったの？何か心当たりはない？」
ドラミはドラパンにセワシのことを聞きました。

「これで１６人目になったか？」
「１６人目？」「セワシさんが？」
「ああ。実は世界中から１０代の子供達が１６人も行方不明になってしまったんだ。」
「何ですって！？」
「私の友人もミミミもその１人なんだ。」
「ミミミちゃんまでが？」
ミミミというのはドラパンの友人の少女。数ヶ月前にアチモフに捕えられてしまったがドラえもんズに無事に救助されたのです。
「ああ。数多くの現場では子供達の持ち場があちこちと落ちていたのでな。警察はそれを見て誘拐されたと思っているんだ。」
「もし、ドラパンさんの言っていることが本当だとしたらセワシさんは誘拐されたのかもしれないわ。」
確かにこの有様を見れば泥棒に入られたのも同じです。
「だとしたら、何処かに犯人とかのメモがあるはずだ。探してみよう。」
２人はドラえもんの言葉に頷きました。３人は部屋の辺りを探し始めました。
「えっと・・・。メモはっと・・・？あれ、何処にあるのかしら？」
「此処にもない。こちらにもない。何処にあるんだ。」
３人は必死にメモを探しています。しかし、何処にもありません。何度も調べているうちにドラミは机の上の紙切れを見つけました。
「あったわ。」
「「本当か？」」
ドラミは紙切れを広げて調べてみました。間違いなくメモでした。メモの内容は。
「ドラえもん及びドラミに告ぐ
お前達の大事な友達・野比セワシはこの私が貰った。２２世紀の世界中の１０代の子供達は魔王様復活の為の生贄に捧げることにし

たのだ。１０代の子供達の心は特に美しい心を持っている。その美しい心を持った奴を生贄に差し出せば魔王様は復活して世界は闇に覆われる。ジャンヌ・ダルクの生まれ変わりも魔術師のクロウ・リードの継承者もいないお前達には世界は救えない。この世は終わりだ。諦めろ。魔王様の復活ももうすぐだ。

ふはははは。

悪魔のバラスより」

３人はメモを読んで動揺しました。

「やっぱり、誘拐だったんだわ。」

「しかもこの時代にはぐれ悪魔が出現したのか。なんてこった。」

「全くだ。ところでその悪魔とか魔王とかどういうことなんだ？私には何がなんだか判らないんだ。」

どうやらドラパンはその悪魔がなんなのか知らないのです。ドラえもん兄妹はこれまでのことを話しました。

悪魔というのはジャンヌ・ダルク及び魔術師のクロウ・リードが戦った軍団のことを言うのであります。ジャンヌ・ダルクは悪魔に手にかかって命を落としてしまい、日下部まろんと云う人間の少女に転生しました。一方クロウ・リードは寿命が近づき死に際に自分が製作した不思議なカード・クロウカード及び守護者の月と守護獣のケルベロスを本の中に封印して、木之元さくらと云う少女に託したのです。さくらとまろんは仲間達もちろんドラえもんズの力を借りて魔王を撃破しました。しかし悪魔達がはぐれ出ているためまだ安心はできないのです。

「なるほど、そういうことか？」

「そういえば、さくらさんやまろんさん。今頃どうしてるかしら？」

「気になるな。」

「そんなに心配なら、様子を見に行けばいいじゃないか。」

ドラパンの発言に２人は納得しました。

「そうね。いっそのこと悪魔のことを報告しなくちゃいけないわ。

」
「そうだよ。彼女達に助けを求めればセワシ君たちは助かるんだ。」
「だろう。私も1度も彼女達にあったことはないが共に怪盗するのは悪くないな。」
「そうと判れば20世紀に！」
「しゅっぱーつ！」
「オー！」
ドラえもん、ドラミ、ドラパン一行はミミミとセワシを助けるためにタイムマシンに乗ってまろんたちに助けを求めに20世紀に向かいました。

ドラパン登場（後書き）

次回はさくらちゃんとまろんちゃんがドラパンと対面するシーンです。そしてドラえもんとドラミちゃんの感動の再会です。
もしかしたら知世ちゃんと都ちゃんも登場するのかもしれません。
おまけにまろんちゃんの両親やさくらちゃんのお父さんやお兄さんにばれてしまうかもしれませんね。
まろんちゃんの両親にフィンちゃんが見えちゃうのかもしれませんね。
とにかくです。今回はドラえもんズとさくらちゃん達の共闘を書き上げたいと思っています。

石にされた家族（前書き）

大変お待たせしました。
まろんちゃんとさくらちゃんが遂に登場しました。
この小説は２００年の冬休みから始まったことです。
１２月２５日といえば雪兎さんの誕生日でしたね。まるで雪兎さんはイエス様みたいです。さくらちゃんは雪兎さんに何をプレゼントする気でしょうか？もしかしたらおいしい果物かもしれませんね。
アボガドとか。（笑い）
それはさておき、今回は桃矢くんがピンチになってしまうそうです。
もしそうなれば彼女は如何戦うできでしょうか？それはおいおい、解説しておきます。

石にされた家族

木之元さくら（友枝小学校６年生）は雪兎を誘って家族旅行で朝鮮の平壌に来ました。なんと仲良しの日下部まろん（桃栗高校２年生）と彼女の両親も一緒に朝鮮に来ました。

「わーい。わーい。朝鮮だ。朝鮮だ。」

さくらはこの旅行で大はしゃぎです。公園では彼女達の家族が楽しそうに話しています。

「元気なお嬢さんですね。木之元先生。」

「はい。娘のさくらさんは元気で無邪気な子です。」

「ただ、母に似て天然なのが玉にキズです。」

お兄さんの桃矢はとんでもないことを言ったのです。

「桃矢、それはないよ。」

雪兎はとりなした。

「私の娘のまろんちゃんともうすっかり仲良しですね。」

まろんはさくらと一緒に町へ散歩に行ってしまいました。

「元から仲良しなんですよ。さくらさんとまろんさんは。」

「あれ、そうなんですか。」

「はい。」

５人はまろんたちの後ろ姿を笑って見送った。

木之元さくらは一見は極普通の女の子ですが実は星の力を持つ魔法使いです。２年前、お父さんの地下の書斎でクロウカードの封印を解いてカードを日本中にばらまいてしまったために封印の獣のケルベロスことケロちゃんと共にカード集めをすることになりました。その１年後全てのクロウカードを集めた彼女は最後の審判で守護者の月の試練でクロウカードの新たな保持者及びケロちゃん達のご主人様となり、クロウカードをさくらカードに変えていろいろな事件を次々と解決してきます。

日下部まろんはさくら同様外見は普通の女の子ですが、実は聖なる少女ジャンヌ・ダルクの生まれ変わりの神風怪盗ジャンヌです。1年前、準天使フィンに導かれて怪盗となり幼少時に悪魔に取り付かれた両親の匠パパところんママを救うために美術品に潜む悪魔を次々と回収していきます。激しい戦いの末に魔王を倒し遂に両親を救い出しました。現在は逸れ悪魔を退治すべく怪盗をしています。

彼女達は現在は力を合わせ互いに困難を乗り越えて悪魔達と戦っています。

2人は平壌の町で買い物です。土産屋や洋服屋を見て回ったり、いろいろなゲームを楽しんでいたりしています。まるで観光をしているかのようです。やがて彼女達は人気の少ない野原に来ました。

「知世ちゃんや都さん達も来ればよかったのにですね～～～。」

「しょうがないじゃない。くじ引きの観光で当たったのは私達一家とさくらちゃん一家だけなんだから。」

「私達も一緒だけどね～～～。」

「右に同じや～～～。」

フィンとケロちゃんはカバンから出て彼女達に姿を見せようとします。

「フィン。」「ケロちゃん。」「「もう。出てきちゃ駄目でしょう。」」

「いいじゃない。」「此処には人はおらへんし、空気はうまいし。」「「カバンの中はもうたくさん。」」

フィンとケロちゃんは彼女達の頭上の上で浮遊しまわっています。そんな楽しそうな彼を見て最初は呆れてしまいましたが、次第に清らかになり芝生の上で横になりました。

「ふう。なんか平和だな。魔王を倒してもう9ヶ月か。」

「何時になったら逸れ悪魔は全部いなくなるでしょうか？悪魔が

全ていなくなれば万事解決ですのにね。」
冬休みが始まって直に彼女達のそれぞれの家族は3泊4日の朝鮮旅行に行くことになりました。
「クリスマスに家族旅行なんて意外ね。」
「ええ。それにしてもこのところ悪魔が出ていませんね。もういなくなったんでしょうか。このところ怪盗ジャンヌが出てなくて警察は怪盗はいなくなったと言ってますが。」
「判らないわよ。いつ悪魔が人間の美しい心に取り付くか判らないわ。」
「せや。さくらカードは全部そろっても事件はまだ続くさかいな。」
『確かに・・・。』
魔王はいなくなっても、さくらカードは全部そろっても彼女達の本当の戦いはまだ続きます。
「それより、ドラえもんズの皆はどうしてるかな?」
彼女達は時にはドラえもんズの力を借りていることがあります。そのドラえもんズは22世紀にいます。
「会いたいな・・・。」
2人が呟いたその時に急に空模様が黒くなりました。その異変に気付いた二人は直に起き上がりました。
「さっきまでいいお天気だったのに・・・。」
「一体何が・・・。」
その時、フィンが頭痛に苦しみだしました。
「フィン!」
ケロちゃんはフィンをいたわるように抱きとめました。
「悪魔だわ・・・。悪魔の仕業よ・・・。」
「なんやてー!」
その時雷鳴が起こりました。その雷鳴で。
「とにかく、皆のところに戻りましょう。」
「そうですね。」

ケルベロスは未だに頭痛に苦しんでいるフィンを抱えてさくらのリュックの中に入りました。彼女達は急いで家族のいる公園に引き返しました。

一方公園では藤隆パパ達がさくらたちの帰りを待っています。それが急に天気が悪くなってしまったために心配になってきました。

「急に空が暗くなったね。さくらちゃん達大丈夫かな？」

「大雨にならなきゃいいがな。」

「でも、雨は降っていないですよ。ほら。」

藤隆パパは暗い空を指差すと確かに雨粒は落ちていませんでした。

「あ。ホントだわ。雨が降っていないわね。」

「それでも心配だな・・・。様子を見てこようか？」

「なんなら、僕も行きます。」

藤隆パパと匠パパはまろんとさくらを探しに町に出かけようとしました。その時に雷が2人に落ちました。

「「父さん（おじさん）！」」

「貴方！」

2人は石になってしまいました。その姿を見て3人は躊躇しました。

「これは一体、どういうこと！？」

ころんママは夫に駆け寄ったその時に。

「ころんさん！危ない！」「え！？」

雪兎の静止も虚しく雷がころんママにも当たり石になってしまいました。

「ころんさんまで・・・。」

「おい、ゆき。これはただの雷じゃねえぞ。」

「僕もそう思う。」

その時、上空から大きな穴が開いて穴から青い達磨みたいな狸の人形、手品師の姿をした紫の狸の人形、そして赤いリボンを付けた黄色い犬の人形が転がり落ちて桃矢と雪兎の頭に直撃しそうになり

ます。そこを桃矢が犬の人形を雪兎が２つの狸の人形を抱きかかえて受け止めました。
「大丈夫？」
「ありがとう。月さん。」
青狸が雪兎を見て呟いたときに彼がピクリと反応しました。
「月？」
青狸が改めてみると雪兎が自分と紫狸を抱えていることを知りました。
「あれ、雪兎さん。」
「君はドラえもん？」
「なんだ、ゆき。知り合いか？」
「うん。そんなところかな。ところでその子の方は？」
「大丈夫だ。気を失っている。」
桃矢の腕に抱えられている犬の方はやっと目を覚ましました。
「あれ~~~。」
「お、気がついた。」
犬は目を開けて桃矢を見ると目を丸くしてしまいました。
「あれ、貴方は。」
その時、雷鳴が鳴り響きました。その音に気付いた桃矢たちはその雷鳴のする方を睨みつけました。
「なんなんだ。阿野雷は？人を石にばっかしやがって。」
突然雷撃が２人の前に落ちました。その光から黒いストラップレスのドレスを来た紫のショートヘアの１０代半ばの娘が姿を見せました。
「お、女の子？」
その娘は２人を見るなり、不適な笑みを浮かべました。その直後に雪兎に抱えられている紫狸が目を覚ましました。
「あれ、ここは？」
「あ、気がついたドラパン？」
「ああ。（辺りを見回すと）もうこの時代に来たのか？」

桃矢の腕の中の犬がいいました。
「ええ、来ましたよ。ドラパンさん。」
「あれ、ドラミ。そんなところにいたのか。」
その頃3人を抱えていた桃矢と雪兎は少女を睨みつけました。
「何者だ！？お前！」
桃矢は大声を出して問うと娘は不適な笑みを見せて答えました。
「こんちにわ。木之本桃矢さん、私はレアン。堕天使レアン・フルーレ。貴方を探しに来たの。」
突然の言葉に桃矢は耳を疑って驚いたのです。

石にされた家族（後書き）

次回は桃矢くんが堕天使の女の子に誘拐されるかもしれません。もしそうなったら彼女達がすぐにその堕天使と戦わなくてはいけません。さくらちゃんは普段はお兄さんと喧嘩ばかりですが傷つけられるとすぐに怒り出すのかもしれません。結局さくちゃんたちがドラパンと対面する話が次回に回ってしまいました。すいませんでした・・・。

今日から私は忙しくなって次話が遅れるのかもしれません。

ちょっとの間はご迷惑になるのかもしれませんが、少々お待ちください。（ペコリ）

旅立ち（前書き）

ようやく3話目が出来上がりました。
長らくお待たせしました。制作に大分時間がかかりました。
何しろ、いろいろと忙しかったものですから。
さて今話は、さくらちゃんのお兄さんの桃矢さんの前にレアンと云う堕天使の女の子が現れました。レアンは桃矢くんを浚ってしまいます。それを知ったらさくらちゃんは悲しむでしょう。
そもそもお兄ちゃんはさくらカード編で魔力を失ってしまいましたが、もしかしたら今作では復活してしまうのでしょう。そうなればさくらちゃんたちの敵になって彼女達と対峙してしまう羽目になってしまいます。そうなればとても哀しいエピソードが生まれてしまいます。その先はまだ遠いですから、後で説明しておきます。
さくらちゃんとまろんちゃんはドラパンと対面して行動を共にします。彼女達はドラえもんズとどんな冒険をするのでしょうか。その話は彼らがパリに着いてから話しておきます。
後でレインちゃんを登場させましょうか。

旅立ち

桃矢はレアンと名乗る少女にとても戸惑っています。彼女は桃矢を探しに来たというのですからさすがの桃矢も吃驚してしまいました。

「どういうことだ！？何で俺を探してるんだだよ！？」

レアンは桃矢にクルクル回転して近づいて両手で顔を包みました。

「貴方には私達が必要としている力が眠っているのよ。」

「何だと？」

レアンは桃矢の顔を放して左手を桃矢の顔に当てました。

「これから貴方は私達と一緒にジャンヌや星の魔女さんと戦うのよ。」

「何よ、それ！？」

桃矢に抱かれたドラミが叫びます。

手から黒いオーラを出して桃矢の意識を奪いました。もちろん桃矢は倒れこみレアンに抱かれ同時に抱かれていたドラミが下に落ちて尻餅をつきました。

「あいたたたた・・・・。」

「大丈夫か！？ドラミ！」

ドラえもんはドラパンと共に雪兎に抱かれながらドラミに近寄ったのです。

「ドラミちゃん、大丈夫？」

「はい、大丈夫です。」

ドラミは立ち上がると尻の泥を叩き落としました。続いてドラミは下から少女を睨み付けました。ドラえもんもドラパンも雪兎も少女を睨みました。

「桃矢を放せ！彼に一体何をしたんだよ！？」

「雅か殺したのではないだろうな！？」

少女・レアンは目を見開いて一同を見て首を振りました。

「大丈夫よ。ちょっと眠ってもらっただけ。」
「何がちょっとだ！今すぐその人を返せ！」
ドラえもんは身を屈めて頭上を彼女に向けて飛び跳ねました。石頭を送るつもりです。ところがレアンは片手を突き出してドラえもんを止めました。
「何！？」
「オイタは駄目よ。仔狸ちゃん。」
少女はドラえもんを雪兎に向かって投げつけました。当然、ドラえもんの石頭は雪兎の腹部に命中してしまいました。その反動で雪兎は草原に仰向けになって気を失ってしまいドラえもんは彼のお腹の上で頭に大きなたんこぶを作ってうつ伏せになって目を回してのびています。
「ドラえもん！」「雪兎さん！」
２人・・・じゃなくて・・・、２体は彼らに駆け寄りました。その間にレアンは桃矢を肩に乗せて黒い翼を広げて上空に飛びさりました。
「あらあら、阿野人のびちゃった～～～。まあいいか、お土産は手に入ったしこのまま、帰りましょう。」
レアンは不適な笑みで一同を見下ろして飛び去りました。その時に、散歩を済ませたまろんとさくらが帰ってきました。もちろんフィンやケロちゃんも一緒です。
「雪兎さーん！」
「あ、さくらちゃん達だわ！」
「さくらちゃん？阿野子が？」
「ええ、隣にいる阿野女性が日下部まろんさん。彼女が２０世紀の怪盗ジャンヌさん。」
「ほうう。」〜あの少女達が・・・・。〜
ドラミはさくらたちに手を振りました。彼女達はそれに気付きました。
「あれは・・・。」

「ドラミちゃんや。なんでこないな所に来たんやろか？」
「それに・・・。あのロボットは・・・？」
彼女達はドラパンは初めてでした。

さくらとまろんたちは今の状況を見て愕然としました。
「何これ・・・・？」
「信じられない・・・・。お兄ちゃん・・・。」
自分達の両親や父が雷に当たって石になったと知れば確かに戸惑ってしまいます。おまけに桃矢は堕天使の少女に連れ去られてしまいさくらは特に動揺しています。
「やっぱり・・・。悪魔の仕業だったのね・・・。」
「しかも未来に現れるなんて・・・。」
一行は愕然とした。その時、漸く気絶していたドラえもんと雪兎が息を吹き返しました。
「雪兎さん。」
「お兄ちゃん。」
ドラミとさくらはドラえもんと雪兎に寄り添いました。
「あれ、さくらちゃん。お帰り。」
「さくらちゃん！」
「ドラちゃん！大丈夫！？」
「うん。久しぶりだね。」
「私もだよ。（慌てた表情になって）ねえ、未来で何があったの！？」
「（まろんも駆け寄って）私達に出来ることならなんでも言って。未来でも過去でも悪魔は退治しないといけないから。」
ドラパンはまろんの後ろに立って言いました。
「そのことなら私が話しておこう。」
「え、貴方が・・・。」
ケロちゃんはドラパンのところに来て眺めました。
「そういえば、アンタ何処かで見たか親と思ったら22世紀のパ

リの義賊怪盗のドラパンやないか？」
「何、私を知ってるのか？」
「せや。まあ、その辺は後で説明したる境に未来での状況を詳しゅう教えてくれへんか？」
「ああ、そうだな。」
ドラパンは雪兎がいるにも関わらずに未来での状況を話しました。

話を聞いたまろんとさくらは・・・。
「「魔王の復活のために２２世紀の世界中の子供達を生贄に捧げるですって~~~~！？」」
「ウキ~~~~！そんなことのために~~~~！許せない！まろん、さくらちゃん！今すぐ２２世紀に飛んで悪魔を封印よ！」
「ワイもついてったる～～～！」
「ちょっと待って。」
張り切りのケルベロスとフィンに雪兎が静止しました。
「ほえ、雪兎さん。」
「今度の敵は未来まで生きられた悪魔なら、かなり強い力の持ち主かもしれないよ。」
「雪兎とやらの言うとおりだ。バラスと名乗る悪魔はどんな奴かは知らんが・・・。」
「知らないんかいい！」
ケロちゃんはドラパンに突っ込みをいれます。
「なんらか対策が必要だな・・・。」
「ドラパンさんの言うとおりよ。このことはキッドや皆にも知らせなくちゃ。」
「確かにそうだ。他の皆にこのことを知らせなきゃ！」
ドラえもんはポケットから親友テレカを取り出そうとしたその時、ドラパンが何か閃いたようです。
「そうだ。セイント・ウォーリアに相談しよう。」
『セイント・ウォーリア？』

「聞いたことはあるで。」
「（首を傾げる）ほえ、ケロちゃん、知ってるの？」
「僕も知ってる。昔、クロウ・リードが所属していた聖なる組織だ。」
「セイント・ウォーリアとは聖なる力を持った魔術師達が悪魔と戦い世界を平和に導く組織だ。その組織の本部は２２世紀のフランスのパリにある。」
「あー。思い出した。神様の話だとその組織の人たちは普段は協会のスタッフとして働いているんだったわ。」
「まさかとは思うけど、そのセイント・ウォーリアって秘密組織なの？」
「そういうことだ。周囲の人に知れ渡ると大騒ぎになるからな。因みにこのことを知っているのは私１人だ。」
「なるほど。
でも、どうしてドラパンがそのことを知ってるの？」
「話は簡単だ。私はその司令官と行動を共にしているんだ。」
『え～～～！』
「あのドラパンが！」
さくらたちは大声を出しました。
「そうだ。彼は私の理解者の１人だからな。」
ドラパンは耳を押さえて肯定しました。
「そういうことならいいでしょう。お父さん達を元に戻すためにその組織さんの力を借りて悪魔を封印しましょう。」
「私も戦う。早くバラスとか云う悪魔を遣っ付けてお兄ちゃんを助け出す。」
「僕も賛成だよ。さくらちゃん。」
雪兎は背中から天使のような白い大きな羽を出して自分を包み込み月に変身しました。
「桃矢を奪い取られて腹の虫が収まらん。それに阿野女への仕返しだってある。」

「僕もだよ。仔狸呼ばわりされて頭に来てるんだ。」
「私だって、セワシさんを取り返すためにはまずパリに行く以外の方法はないわ。」
「せやな。念のために香港にいる稚空の兄ちゃんに知らせなあかんな」
「だったらフィンも香港に行く。」
「ならば、私もこのことを彼に知らせるために香港に行く。」
さくらとまろんは3人の役割に頷きました。
「フィン、お願いね。」
「月さん、ケロちゃん。頼んだわ。」
「「「ああ（ええ）！」」」
「よし、決まりだ。」
情報担当のケルベロスたちを欠いた一行は開いた穴に入ってタイムマシンに乗ろうとしました。さくらとまろんは乗る前に石にされた藤隆パパ達を見て決意の眼差しを向けました。
「お父さん。お母さん、待ってて。絶対に元に戻すから。」
「お父さん、待ってて。絶対にお兄ちゃんを助け出して元に戻すから。」
くるりと背を向けて二人はタイムマシンに乗りました。こうして、さくら一行はタイムマシンに乗って２２世紀のパリに向かいました。

旅立ち（後書き）

次回は稚空くんと小狼くんが香港で石にされた人々を目の辺りにします。その光景を目にすれば誰でも愕然としてしまいますよね。もしかしたら、彼らも同行してしまうでしょう。それでもって知世ちゃんや都ちゃんも一緒に来るでしょうか。

その話は追々説明しておきます。

次回はもっと時間がかかるかもしれませんが、しっかり作っておきます。

香港パニック（前書き）

今回は格作品のヒーローが主人公2人娘の後を追うことを決意するお話です。
稚空くんは元々は批把高校の生徒だったんですが、父親の離婚と再婚の繰り返しで家出をすることになってしまいました。その時、悪魔に操られたフィンちゃんを捜索していたアクセス君と仲良くなってジャンヌの怪盗の妨害をするために桃栗町に引っ越してきました。ところが、遂に魔王の力が強くなって世界は大混乱に陥ってしまいましたが、まろんちゃんの聖なる力でフィンちゃんを取り戻し、魔王を撃退しました。
一方、小狼君はさくらちゃんが飛び散らせたクロウカードを探しに香港から友枝町に来ましたが、カードは結局さくらちゃんの物になり、その後はさくらカード変化の手伝いをして帰国しました。現在はさくらちゃんと遠距離恋愛をしています。
この2人はかなりの似たもの同士で互いに助け合っています。その彼らが本当に彼女達と協力して悪魔と戦わなければなりません。
香港では小狼くんが人々を石化した犯人を目撃してしまうのです。
レアンに続く堕天使が登場します。
一体、逸れ悪魔の手下の堕天使は何人いるのでしょうか。それはまた後に取っておきます。
それではいよいよ彼らの旅が始まります。

香港パニック

名古屋稚空は大病院の医師を務めている父に連れられて香港に来ました。今回はまろんの幼馴染の東大寺都や水無月大和委員長も一緒です。そして中国娘・李苺鈴に招待された大道寺知世も一緒です。

「久しぶりね。香港旅行だなんて・・・・。前回は此処でジャンヌが出てきて大騒ぎだったわね。」

「全くですよ。前は折角シンドバッドを捕まえたというのにまた逃げられてしまいましたよ。今度彼らが李家のお宝を狙おうとしたら二人仲良くとっ捕まえてあげますよ。」

委員長は拳を握りしめて決意を胸にしました。それを見た稚空はたじたじします。

「ふ・2人仲良くって委員長最近はシンドバッドだけじゃなくてジャンヌを捕まえることに一生懸命になってるな。」

「当然ですよ。このところ東大寺さんはジャンヌやシンドバッドを捕まえようとしないから僕が捕まえようとしているんですよ。ただし、僕は東大寺さんみたいにトラップは使わず根性で捕まえます！」

「根性ね・・・。」

都が最近はジャンヌやシンドバッドの逮捕を励まなかった原因は彼女達の正体を知ってしまったからでした。そのために彼女は最近は父の手伝いもしなくなってお母さんはほっとしました。

逸れ悪魔をジャンヌやシンドバッドが次々と封印すると天界の存在が知れ渡るようになっていきます。そのためにまろんや稚空達以外の人物にも見えてしまうようになり、アクセスやフィンも隠れてしまうようになりました。

「まあ、でも最近はその怪盗も出てこないから平和よ・・・。」

「そうでしょうか？油断は禁物ですよ。何時ジャンヌやシンドバッドが現れるかどうか判らないから警戒はしておいてくださいよ。

良いですね！？」
「（呆れ顔）はいはい・・・。」
都は委員長の意見を黙って聞いたのです。その横で知世は微笑ましそうな顔で見ているのです。
「相変わらず仲のよろしいカップルですこと・・・。」
「まあな。阿野２人このところ仲が良いしな。」
「本当に・・・。」
その時、一行の背後から元気な少女の声が聞こえました。李家の少女の李苺鈴です。彼女は歩行者道で手を振っています。
「あら、苺鈴ちゃんですわ。では、私はこれで失礼いたします。今日は護衛をありがとうございました。」
「いや、いいんだよ。たまたま日本の空港で一緒になったから散歩に誘っただけだ。気をつけていけよ。阿野子に招待されて此処に来たんだろう。」
「はい。ありがとうございます。」
知世は稚空にお辞儀をすると声のするほうに向かいました。知世は苺鈴と合流すると彼女と一緒に洋服屋の方に向かいました。
稚空は彼女達を見送ると父が背後から出現しました。
「あらあら。もう知世ちゃん、行っちゃったの？もう少し一緒に行きたかったな・・・。」
「親父行き成り後ろから出現するなよ。幽霊なんかじゃあるまいし。」
「ははは。相変わらず元気だね。稚空君は。」
「本当にもう。」
顰め面の稚空は会話中の都と水無月委員長に向くと。
「都、委員長。議論の続きは後にしてホテルに行くぞ。」
「はい。」「判ってるわよ。」
稚空の言葉に２人は会話を中断して４人はホテルに向かいました。
香港の町は平和で、カップルや親子連れがいっぱいで賑やかな笑

い声が一杯です。
「平和ね・・・。逸れ悪魔がこのところ出てないから世界も平和になってきたのね・・・。」
「まあな。というかもう悪魔はいなくなって神様の力が益々強くなってきみたいだしな。
しかし、まろんの奴、いくら家族旅行が楽しみだったからって、クリスマスに朝鮮旅行に行っちまうなんて酷いぜ。」
「いいじゃない。まろんは悪魔のせいで一度も家族旅行はしたことはなかったんだから。」
「そうだけどよ・・・。あああ、まろんは本当にケチだよな・・・。」
稚空はブウブウ良いながらホテルに向かいました。その横で都はくすくすと笑っています。
〜でも、このところまろんが元気一杯でよかったな。〜

一方、知世は苺鈴と買い物を済ませて李家に向かいました。
「今日は一杯お洋服を買いましたわね、苺鈴ちゃん。」
「ええ、もうすぐ新年会ですもの。いろいろとおしゃれをしなくちゃいけないわ。」
「お正月を期に彼氏探しですが、おほほほ。意外と面白そうですわね。」
「意外ととは何よ。意外ととは。ホントにもう。
（溜息）それにしても木之元さん、家族旅行に朝鮮行くなんてどうかしてるわ。小狼はどうするのよ。会いたがってるのに。（ぷりぷり）」
「まあまあ、苺鈴ちゃん。そう悪しからずに。さくらちゃんは一度で良いから家族で海外旅行に行きたかっただけですもの。しょうがないですわよ。」
「しょうがあるわよ。もう木之元さんは〜〜〜〜。」
苺鈴はかなり怒っています。

〜自分だって本当はさくらちゃんに会いたいだけですのにね・・・。〜

2人は荷物を抱えて李家に行こうとしました。その上空では空模様の天候が悪くなっています。

「あらやだ・・・。雨が降りそうだわ・・・。傘持って来ればよかったな・・・。大道寺さん、早く家に帰りましょう。」

「ええ、なにやらごろごろと雷が鳴っていますし・・・。」〜稚空さんや都さんたち、大丈夫でしょうか?〜

2人は猛ダッシュで李家に向かいました。

苺鈴の家に着いた2人は家に入り込みました。

「只今帰りました〜〜〜。お母様〜〜〜。」「お邪魔しま〜す。」

しかし家の中で返事は聞こえません。

「あれ、どうしたのかしら・・・。皆今日は特に出掛ける予定はないのに・・・。」

「何処に行かれたのでしょうか・・・・?

あ、判りましたわ。今日は娘の苺鈴ちゃんのお誕生日ですから、吃驚させようとしているに違いありませんわ。」

「何、言ってるのよ?私の誕生日はまだ先よ。全く皆何処に行ったのよ。」

2人は家中、家族を探しています。しかし、その気配は全くなしなのです。

「皆、何処なのよ〜〜〜〜。お母様。お父様。」

苺鈴は裏庭の戸を開けて両親を探そうとしています。

「お父様、お母様。」

その時、彼女は何かを目にしました。その時、彼女の悲鳴がリビングを探していた知世に聞こえました。知世はすぐさま裏庭のほうに駆けつけました。

「どうかなさったんですか?苺鈴ちゃ・・・・。」

知世は何かを見て顔が真っ青になってしまいました。

一方上空で雷鳴が鳴り響き名古屋父子と都と水無月委員長はようやくホテルに向かって走っています。
「何なのよ。この地方の天候は一日晴れって言ってたのに。急に曇りだすなんてどういうことよ。」「おまけに何故か雷光が起こっています。」「最近の天気予報は不安定だからな・・・。よくあることとさ。」「それより、雨が降ってこないうちにホテルに行こう。」「ああ、そうだな。」
一行はホテルに向けて走っています。その時、雷が委員長に直撃してしまいました。
「ワーーーーー！」
「委員長！」「水無月くん！」
委員長の悲鳴と同時に彼の両足の色が変化して固くなりその変化は首の付け根まで続き、遂に頭全体も覆ってしまい委員長は石になってしまいました。
「な、何・・・これ？」「どうなってるんだろう。ねえ、稚空くん・・・。」「お、俺に聞かれても・・・。」〜もしかして・・・、逸れ悪魔の仕業じゃ・・・。〜
そのとき、雷が稚空達に直撃しようとしました。
「危ない！」
稚空の父が2人を突き飛ばして雷に当たってしまい石になってしまい、その場に倒れてしまいました。
「親父！」「おじ様！これは一体どういうこと！？悪魔はいなくなったはずじゃなかったの！？」
都は絶叫しました。
「どうやら、逸れ悪魔がまだ一匹残っていたようだな。」
稚空のバックから白い衣装を纏った長い黒髪の白い翼の小人サイズの少年が姿を表しました。「アクセス。」彼は、天界からフィンを追って人間界に舞い降りた天使のアクセス・タイムです。数多くの逸れ悪魔を倒した御褒美にフィンと同じ準天使に昇進しました。

「逸れ悪魔が香港にも現れたの？早く探して封印しなくちゃ・・・・。」
「待て、落ち着け。念のために友達の家に行ってる知世や小狼たちに電話したほうがいいぜ。」
「うん。知世ちゃんに電話してみる。」
都は荷物から携帯を取り出して知世に連絡しました。

知世は苺鈴とその両親を石に変えた人物を目の辺りにして腰を抜かしています。犯人は背まで掛かる赤白い髪を肩のところで束ねて赤い衣装を着た黒い瞳の１０代後半の少年でした。その少年の背に鴉のような黒い翼を生やしています。その少年は天に手を掲げて雷を召喚して苺鈴一家を石に変えたのです。
「貴方は・・・一体・・・？」
「くくく、俺か。俺の名は堕天使・シオン・アーチェリー。人間を滅ぼしに来た。」
「そんな・・・。」
シオンと名乗る少年は知世に手を伸ばしてきます。
「お前も石にしてやる・・・。」
知世は石にされそうになって震え上がりました。その時、一本の剣がその手を遮ろうとしました。知世は剣の主を探そうと横目で詮索すると、緑の式服を纏った李小狼が剣を持って彼女に微笑んでいます。
「怪我はないか？大道寺？」「はい、お陰で助かりましたわ。ありがとうございます。」
邪魔が入ったことでシオンは舌打ちをしました。
「チッ！邪魔が入ったか！？まあいいだろう！これだけの人間を石に買えれば何の問題はないだろう！」
シオンは黒い翼をはためかせて上空に飛び上がりました。
「待て！逃げるな！苺鈴たちを元に戻せ！」
「断る！俺は大事な役目を終わらせた！何れ世界は悪魔・バラス

様の物になるだろう！ふはははははは！では去らばだ！」
シオンの姿は星の光になって消え去りました。
「クソウ！」
「一体、阿野人は一体？もしかして、逸れ悪魔の残党では・・・・・。」
そのとき、知世の携帯が鳴って出ました。
「はい・・・？あ、都さん？大変なんです。」

「ええ！？苺鈴ちゃん達も石になったの！？」
〈はい！李くんに助けられて私は石にならなくて済みましたもののあのシオンとかいう黒い羽の堕天使さんは世界はバラなんとかさんの物になるとかおっしゃっていました。もしかしたら逸れ悪魔さんがどこかに潜んでいるのかもしれません。〉
「やっぱり逸れ悪魔の仕業だったのね・・・。知世ちゃん、あたし達今から小狼君の家に行くからあんたはそこで待ってなさい。」
〈はい。〉
都は携帯の電源を切りました。
「やっぱり、逸れ悪魔が出やがったか。」
「今回はやけに手ごわいな・・・。」
「まろんやさくらちゃん、大丈夫かな？」
その時、「おーい！」と声がして、上空からアクセスと同じ準天使の少女とライオンと狼を足して2で割ったような獣と白銀の長髪の青年が舞い降りてきました。
「フィンちゃん！」「ケロちゃんと月さん！」
2人と一匹は彼らの前に降り立ちました。
「皆無事だったのね！」「フィンちゃん達も無事だったんだ！よかったな。さくらちゃんやまろんはどうしてるんだ！？」
「あれ、そういえばあいつらいないな。雅か・・・！？」
「大丈夫や。2人ともぴんぴんしとるで・・・。」
「よかった。」

「それにしても。（辺りを見回す）一体これはどういう状況だ・・・。」
「うん、実はさ・・・・。」
アクセスたちはこの状況を述べました。
「そうか、此処にも悪魔の魔の手が伸びたか？」
「実は、朝鮮でも同じような事件が起こってるのよ。」
「なんですって？それじゃさくらちゃんの家族やまろんの両親は石になったの？」
「ああ。それだけやない。桃矢兄ちゃんは堕天使の姉ちゃんに連れ去られてしもうたんや。」
「ナンだって~~~~！」「一体どういうことよ！？」
「判らん・・・。後な・・・・。」
ケルベロス達はまろんたちのことを話したのです。
「そういうことか・・・。」
「これは拙いな・・・・。よし、俺達もその22世紀のパリに行ってみようぜ。」
「そういうと思ったわ・・・。それじゃ、レッツゴー！」
「・・・とその前に・・・。」
稚空の言葉に3人は首を傾げました。

”コンコン”
ノックがして小狼が玄関を開けました。外ではケロちゃんを肩に乗せた雪兎・アクセスを頭に乗せた稚空・フィンを抱えた都が立っていました。ケロちゃんはゲッとしました。
「小僧の家やないけ～～～。」
「俺んちで悪かったな・・・。」
「まあまあ。
お待たせ。小狼君。これから、重大な話があるからお邪魔するわね。」
いがみ合う小狼とケロちゃんに都が仲裁に入ります。一行は彼の

家に訪問しました。

部屋では知世が小狼の部屋で待機しています。彼女は窓辺に頬杖着いて暗い空を見上げています。

「さくらちゃん、大丈夫でしょうか・・・？石になってしまわなければよいのですが・・・。」

その時、部屋のドアが開いて小狼が入ってきました。

「李君。」「大道寺。都さんや稚空さんがおいでになったぞ。」

「本当ですか？」

「ええ本当よ。」

都と稚空、そして雪兎が部屋に入りました。

「都さん、稚空さん。それに月城さんやケロちゃん、フィンちゃんも。」

「ハーイ！」「ワイら、ピンピンしとるでー！」

「よかった～～～。あら、さくらちゃんやまろんさんはいかがいたしました？」「そういえば、さくらたちの姿が見えないな。」

「ああ、そのことなら・・・。」

ケロちゃんとフィン達は事情を彼らに話しました。

「なるほど。未来に逸れ悪魔が現れて過去である今の時代で騒ぎを起こして未来をかえようとしているんだな。」

「そういうことや。」

「よし。判った。俺も22世紀のフランスのパリに行ってさくらやまろんさんを助けに行かなきゃ。」

「でしたらあたしも行くよ。」「私もです。」

「いや、お前達は此処で待ってろ。魔力も聖なる力も待っていない奴がくれば巻き込まれちまう恐れがある。必ず、まろんもさくらも俺達が助け出す。」

「うん。判った。」「皆さん。お体にお気をつけてくださいませ。」

「ああ。」「判ってる。」

２人は準備の整えると裏庭に出ました。知世と都は家の中から２人を見送りました。
「稚空、まろんのことをお願いね。」
「任せとけ。絶対にまろんは俺が守る。」
「李くん。さくらちゃんのことをくれぐれもよろしくお願いいたしますわ。」
「なに。心配ない。悪魔を退治したら直に帰る。さくらの兄は好きにはなれないけどな。」
「それじゃ、皆準備はいい？」
『ああ！』
「アクセス、行くよ。」「ガッテンデイ！」
２人は最初に両手を合わせて祈ります。すると合わせた手から光が出てきます。その光を２人の両掌が互いに押し合います。二つの光が１つになると光は少し大きくなり、空に浮上しました。光は小狼の家の屋根の近くの高さまで来ると一直線上の太い光の柱になりました。
４人と１匹はその柱に入りました。
「それじゃ、行ってくるで。」
「お気をつけていってらっしゃいませ。」
「ああ。」
一行はその柱の中で手を振りました。知世や都も手を振って一行を見送りました。
光は天に登ると一秒もしないうちに消えました。その様子を２人は家の中からいつまでも見送りました。
｛頼んだわよ、稚空。｝｛李君、さくらちゃんをお守りくださいませ。｝
その時、上空から赤白い髪の少年が急速で降りてきました。２人は驚きました。
「え？」「何？」

少年は2人の近くまで来ようとしています。

香港パニック（後書き）

遂に稚空くんと小狼君がケロちゃん、月さん、フィンちゃんと共にさくらちゃんとまろんちゃんを助けに２２世紀の香港に向かいます。結局、知世ちゃんと都ちゃんはお留守番をすることになってしまいましたね。っていうわけではありません。彼らが出掛けているうちにシオンとか云う堕天使が帰ってきてしまい、彼女達に襲い掛かってきました。もしかしたら彼女達は彼によって石に変えられてしまったのかもしれませんね。

そういえば、ドラえもんにドラミちゃんとの仲直りを勧めたのび太くんはどうしているのでしょうか？家の中にいるから雷に打たれる心配はないでしょう。ただ、雷に怖がっているのかもしれませんね。今回はのび太くんは置いてけ堀になってしまうでしょう。

そして、ドラえもんズは今はどうしているのでしょうか？ちゃんとドラえもんやドラミちゃん達と連絡は取れたのでしょうか？もし、取れていたら彼らより先に２２世紀のフランスのパリに来ているのかもしれませんね。

さて次回はドラえもんやさくらちゃんがパリに到着する前にのび太くんは今、どうしているのか解説していきたいと思っています。また、別の堕天使に捕まっていなければいいのですが・・・。

念のためにドラえもんズも登場させておきます。開会は・・・じゃなかった・・・今回は長く書いてしまいました。次はちょっと、短めに書いておきます。

のび太くん（前書き）

今回はドラえもんの相棒ののび太くんがドラえもんの帰りを待ちながら宿題をしている場面から始めます。
ドラえもんはドラミちゃんと喧嘩してしまったことから始まったんでしたね。のび太くんは仲直りを進めたもののそのドラえもんはまだ帰っていません。のび太くんはドラえもんの帰りを待っています。
そののび太くんはどうしているのでしょうか。
今回はドラえもんズやエドやジェドーラも登場させておきます。

のび太くん

のび太はドラえもんの帰りを待ちながら宿題をしています。この時代は冬休みに入ったばかりです。本当は昼寝をしたかったのですが、ちょっとでもサボればママや先生に叱られるのが目に見えています。何しろ2学期の成績はとても最悪だったためにしきりに勉強しなければいけません。

「ドラえもんの奴、ドラミちゃんと仲直りできたかな？それにしてもいやな天気だな。雨が降りそうだ。今のうちに洗濯物取り入れようっと。」

のび太は宿題を中断して洗濯物を取り入れるために1階に降りました。

庭でママが洗濯物を取り込もうとしています。

「あら、丁度乾いているわ。よかったわ。でも変ね。今日の天気は晴れなのにどうしていきなり曇ったのかしら。」

丁度のび太が庭に来ました。

「あら、のび太。貴方も洗濯物を取り込みに来てくれたの？ありがとう、洗濯物はもう入れたわ。」

「そうか。よかった。それにしても最近の天気は不安定だな。」

「そうなのよ。それより、ドラちゃんとドラミちゃんはどうしてるの？」

「それが2人ともまだ帰ってきてないんだ。もう仲直りしたのかな？」

その時、上空から雷が舞い降りてママに当たりました。ママは悲鳴を上げながら石になってしまいました。

「ま・ママ・・・。これは・・・一体？」

のび太が驚いているときに2階から”どたんばたん”と散らかったような音がしました。のび太その音に気付くと2階に戻ろうとし

ました。・・・が・・・。

2階では。

「がう～～～～。」「や、やっと着いたであ～る～～～～？」「はらひれほ～～～～。」

エドとドラえもんズが山のような体制になって積まれています。

「いててて。」

「お～～～い。ドラえも～～ん。」「遊びに来たぜ～～～～～。」

キッドとマタドーラが呼んでも返事はありません。続いて王ドラとジェドーラが呼びました。

「のび太く～～～ん。」「何処～～～～？」

返事はありません。

「駄目です。返事はありません。」

「もしかして・・・。」

ドラリーニョが何かを思った顔をしました。その顔にドラニコフ達が集まりました。

『もしかして？』

「もしかして・・・。」「ふんふん・・・・。」

「・・・・野球をしに空き地に行ったんだ・・・。」

ドラリーニョの言葉に一同が固まりました。続いて雷が鳴り響きました。雷鳴の後に、大量に瘤をもらったドラリーニョが目を回してのびています。王ドラはヌンチャクを構えて怒鳴り散らしました。

「こんな曇り空に野球が出来るわけないでしょうが～～～！こんな曇り空に～～～！」

「はらひれ～～～！」

確かに外の天気はかなりの曇りで雨が降りそうな天気です。

「凄い曇り空だぜ。」

その時、稲光がしました。

「ひえ～～～～。雷が振ってきましたで～～～～。せやけど・・・・。」

「ああ、雨が降ってきてないぜ。」「あ、ほんとだ。」
ジェドーラが窓から覗き込むと雨は一滴も降っていません。これはどうしたことだろうと窓を開けて顔を出して庭のほうを見ると・・・。庭には石になった野比母子とそれを眺めている３０前半の男性が立っていました。その様子を見るとジェドーラは震え上がって頭を部屋の中に引っ込めました。
「どうしたであるか？ジェドーラ。」
「（震え声で）ののののの・・・ののののび・・・のびのびのびのび太くんが・・・・。いいいいい、石にな、なっちゃった。」
「なるほど・・・。のび太くんが石に・・・て・・・。」『え～～～～～！』
ドラえもんズの声は部屋一杯に響きました。その声を聞きつけたのか男性は黒い翼を背から出してのび太の部屋の方に飛び立ちました。
「まじかよ・・・。」
「まじだよ・・・。のび太くんやママさん、変な男の人に石に変えられちゃったんだ。」
「それで、その男の人はどんなんや。」
「えっと、黒い騎士みたいな服装で毛は黒い顎鬚とぼさぼさぼ髪の毛の盗賊みたいなおじさんだったんだ・・・。」
「盗賊？ドラパンじゃあるまいし・・・。そんなのいねえよ。」
一同が笑い出したときにその男性が窓を開けてドラえもんズを睨みつけました。当然の気配に一行はサ～～～～っと真っ青な顔になりました。
「いるぞ・・・。盗賊じゃないがな～～～～。」
「あらま、聞いちゃったの？」「おう、聞こえておったぞ。」
男性はそのままのび太の部屋に入り込ぬと後ずさりしたドラえもんズに歩み寄ろうとしました。
「な、なんだお前は！？」
「俺か、堕天使のカンダタ・フユヒだ。」

「カンダタ？あの”蜘蛛の糸”の？」
「ほう。俺の名を知ってるとはな。」
カンダタはドラえもんズに歩み寄ると拳を振り上げました。一同は散り散りばらばらになりかわしました。拳は入り口の襖に当たり壊れてしまいました。
「なんてやつだ・・・・。拳１つで襖を壊すなんて・・・・。しかもあのおっちゃん俺より力が強え。」
「私のカンフーでも歯が立たないほどです。」
「どないします。皆はん。」「決まってらあ。こういうときは・・・。」
キッドが何かを言いかけたその時にジェドーラ以外の秘密道具収納場所の中の親友テレかが輝いたのです。キッドたちはそれを取り出してドラえもんの絵が入っている奴が点滅してるのを見ました。
「ドラえもんだ。」
「くそう、あの狸め～～～！」
カンダタは窓から飛び出して上空に逃走しました。ドラえもんズがそれを追おうとしましたが逃げられてしまいました。
「ドラえもんが俺達を呼んでるぜ。」「場所はどこでっか？」
「２２世紀のフランスのパリです。」
「なんだって。よし、僕達もそこに行ってみよう。もしかしたらあの堕天使のことが判るかも知れないよ。」
「そりゃそうだな。おし、パリにレッツゴーだ！」
『オー！』
キッドの号令に一同は拳をあげました。
ドラえもんズ一行はタイムマシンに乗って２２世紀のフランスのパリに向かいました。

のび太くん（後書き）

遂にドラえもんズとまろんちゃん、さくらちゃん達の冒険の幕が上がります。
パリに着いた彼らは次回でセイントウォーリアと阿智面じゃなくて対面しますがどんな人でしょうか。
答えは次回にとっておきます。
因みにキッドたち他のドラえもんズと無事に合流できるかは不明です。

22世紀のパリ（前書き）

さくらちゃん達は漸く22世紀のフランスのパリにやってきました。今回からはボンバーマンB爆外伝のキャラクターを擬人化アレンジをしたキャラが登場します。

ドラパンはパリで”怪盗ドラパン謎の挑戦状”のヒロイン・ミミミちゃんと会ったと推測されます。そのパリでミミミちゃんは変態科学者Dr．アチモフに人質にとられてドラえもんズと戦う羽目になってしまいましたが、ドラリーニョやドラメッドの説得でミミミちゃん救い出しアチモフを撃退しました。

今回はさくらちゃんとまろんちゃんはドラえもんズやセイントウォーリアと共にパリで悪魔達と大暴れします。

今回は相当時間は掛かってしまいましたが、今回からは台本風な感じにしました。

22世紀のパリ

タイムホールの穴が開いて、さくら、まろん、ドラえもん兄妹、ドラパンが出てきました。

パリの街は賑やかでさくら大戦のゲームで見たときよりもずっと神秘的な町でした。

まろん「此処が未来のパリか。う～～～ん、良い眺めね～～～。もしかしたらジャンヌ・ダルクのお墓も此処にあるのかもしれないわ。」

さくら「そういえば、ジャンヌ・ダルクは悪魔のせいで魔女裁判で火あぶりの刑で命を落としてしまったんですね。」

ドラえもん「さくらちゃん、まろんちゃん。僕達はジャンヌ・ダルクとかいう人のお墓参りに来たんじゃなくてセワシくんやミミミちゃんを助けるためにセイント・ウォーリアを訪ねに来たんだよ。

ドラパン。セイント・ウォーリアがいる協会はどこら辺にあるんだ。」

ドラパン「そうだな。（地図を取り出す）」

ドラパンやさくらたちの現在地はノートルダム寺院の前であります。

ドラパン「協会はこのノートルダム寺院の西から４Ｍ離れた公園のすぐそばだ。」

ドラミ「そんなに遠いの？」

ドラパン「いや。そんなに遠くはない。」

ドラミ「よかった。（ほっと胸を撫で下ろす）」

さくら「えっと・・・。西から４Ｍ先の公園の近くのその教会だっけ？」

ドラパン「そうだ。そこに知り合いの神父がいる。」

まろん「その神父さんはもしかしてとは思うけど、真の姿はそのセイント・ウォーリアの司令官なのかな？」

ドラパン「まろん、ビンゴ。どうして判ったんだ？」
ドラパンの言葉にまろんはズッコケました。
一行は教会に向かって歩いています。
ドラパン「現在のセイント・ウォーリアは先代の子孫に当たる。しいて言えばもしかしたらクロウ・リードの血を引く者もいるのであろう。」
さくら「ほえ～～～。そうなんだ。」
ドラパン「因みに彼らは殆どフランス人の混血でな。先代は1人のフランス人を除いてそれぞれ、朝鮮、イギリス、ベトナムの国の出身らしくてこの町に集まって悪魔と戦ったそうだ。」
ドラえもん「そのクロウ・リードさんは確か、中国人のお母さんを持つハーフさんだっけ？」
さくら「そうだよ。ドラちゃん。」
ドラミ「ということは、中国語は当然話せるのよね。」
5人が会話している間にも長崎でよく見かける大きな修道院のようなものがドラパンの目に止まりました。
ドラパン「おっと。此処だ。ここがその修道院だ。」
まろん「此処がその教会か・・・。随分と大きいな。孤児院みたいね。」
まろんたちは教会を重重と眺めました。
ドラパン「それはそうだ。セイント・ウォーリアが結成される以前は此処は元孤児院だからな。」
さくら「そういえば。”赤い靴”の話では我侭になってしまったせいで両足を失くしたカーレンは教会で孤児の面倒を見てたわ。」
ドラえもん「そういえばそんな話あったな。」
ドラミ「そういう教会だってあるのよ。」
さくらたちが教会と孤児院の関係で話しているとドラパンが中断させました。
ドラパン「会議はまた今度にして教会の中に入るぞ。」

さくら・まろん・ドラえもん兄妹「はーい！」
さくら一行は教会の中に入ろうとしました。

”ぎーーーーー”
ドラパンは扉を開けました。
ドラパン「レイン神父。只今帰りましたーーー。」
ドラパンが呼びかけても返事はありません。一行は中に入りました。ドラパン達が辺りを見回しますが中には誰もいません。返事はしないはずです。
ドラパン「レイン神父ーー。只今帰りましたー。」
”し～～～～ん”
やっぱり誰もいません。
さくら「誰もいないわ。」
まろん「確かにいないわ・・・。（辺りを見回す）それにしても本当に中身は礼拝堂になってるわ。」
ドラミ「（オルガンに寄って）御丁寧にオルガンまであるわ。」
ドラミはオルガンに寄ると蓋を開けて鳴らそうとしますが・・・・。
ドラミ「（足を伸ばそうとしている）と、届かない・・・・。」
ドラミちゃんは足が短いため届きません。まろんはドラミちゃんからオルガンを引き離します。
まろん「ドラミちゃん達には無理よ。私が弾いてあげる。」
まろんはオルガンを鳴らそうと鍵盤を幾つか軽く押して弾きました。まろんがピアノを演奏すると礼拝堂にある赤ん坊を抱えた聖女の肖像画がシャッターのように上がり肖像画の後に大きな穴がありました。
さくら「ほえ～～～～～。何これ～～～～～！？」
ドラパン「これか？これは地下に通じる入り口だ。」
ドラえもん「地下に？」
ドラパン「そうだ。（オルガンに寄って）このオルガンは神の力

を持つ者が演奏すると地下に通じる扉が開くんだ。ただし、電源が入っていなければ通じることはできない・・・。」
ドラえもん「電源？」
まろん「この赤いボタンが？」
まろんが指差す方には赤いボタンがありました。
ドラパン「その通りだ。
さて、神父様にごあいさつだ。」
さくら一行はその穴を通っていきました。

ドラパンの言うとおりその穴は地下まで通るように階段になっていました。さくら一行はその階段を駆け下りました。
さくら「うわ～～～～。此処は秘密基地になってるね。」
まろん「本当に、色色な部屋が並んでいるわ。」
ドラパン「まあな。何せ秘密組織なのだからな・・・。」
ドラえもん「へ～～～～～。」
ドラえもん達は地下を探ってみました。しかし誰もいません。
ドラパン「可笑しいな。神父～～～～～！」
ドラパンが呼んでも誰も返事はしないのです。その時、銀色の扉の奥で何やら騒がしい音がします。
さくら「なんだろう？」
まろん「開けてみましょう。」
ドラえもん「よし、僕が開けるよ。」
ドラえもんはその扉のノブを回して開けました。すると・・・・。
”ズドドドドド・・・・・・！”
5匹の動物のようなロボットがぞろぞろ出てドラえもんの上を通り過ぎて踏み倒してドラパンの元に寄り添いました。まろんやさくらはすんでのところで右に避けた為に無傷ですが・・・・。
ドラミ「おにいちゃ～～～ん～～～～！」
ドラえもん「はらひれほ～～～～！」
ドラえもんは体中に足跡がついて失神してしまいました。

まろん&さくら「な、何なの~~~~？」
まろんとさくらは呆然としています。ドラパンは動物達を撫でながら・・・。
ドラパン「只今。御前達、元気にしてたか？」
ドラパンはこのロボット達と顔なじみだったのです。5匹の動物の内1匹は金色の瞳でとても無邪気な表情の白鳥で、2匹目は左後脚に白い帯のチョーカーを巻いており黒銀の瞳を持っているリスで、3匹目は右耳に青いチョーカーを巻いた桃色の毛並みを持つ赤白い瞳の確りした感じのうさぎで、もう1匹は金色の角を生やしエドと御揃いの白い体を持った青い瞳のユニコーンで、最後は黒い体が大きくて尾に金色の輪をつけたいかにも強そうな感じがする緑の目をしたリュウのロボットでした。ロボット達は全員愛おしそうな表情でドラパンの顔にすりすりしました。
ドラミはドラえもんを起こしながらドラパンに訊ねました。
ドラミ「あの~。ドラパンさん。苑子達は・・・？」
ドラパン「こいつらか。紹介しよう。レイン神父が作ったセイント・ウォーリアの使い魔の聖獣ロボットだ。」
さくら一行「使い魔？」
ドラパン「右から白鳥ロボットのマリコンヌ。リスロボットのキュルケ。兎ロボットのモンモランシー。ユニコーンロボットのクリス。そしてリュウロボットのギーシュだ。」
さくら「ほえ~~~~。この子達ロボットだったんだ~~~~？」
ドラパン「おまえ達に紹介しよう。被害者のドラえもん、ドラミ。過去から来た英雄の日下部　まろんと木之本　桜だ。」
まろん「宜しくね。」
さくら「さくらって呼んでね。」
まろんたちは聖獣ロボット達と仲良しになりました。
ドラパン「あ、そうだ。御前達、レイン神・・・いやレイン司令官は何処にいるか知らないか・・・。」
小柄なキュルケとモンモランシーを除いたマリコンヌ達はドラパ

ンの言葉に頷くと案内するかのように彼らをそれぞれの背に乗せて連れて行こうとしました。因みにドラえもんはギーシュの上でまだのびています。

ドラミ「（ギーシュの上で心配そうに見ている）お兄ちゃん、大丈夫～？」

一行は聖獣ロボットに導かれて大きな扉の前に来ました。扉の上にフランス語で”Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　Ｃｈａｍｂｒｅ”（”司令官室”を意味する）て書かれた札があります。その扉の前に着いたときにドラえもんは息を吹き返しました。

ドラミ「お兄ちゃん、大丈夫？」

ドラえもん「大丈夫だよ・・・。いててて・・・・・。」

ドラえもんは頭をさすって上半身を起こしました。ギーシュは心配そうにドラえもんを見つめました。

ドラえもん「ありがとう。もう大丈夫だよ。」

ドラえもんは笑顔で答えました。

ドラパン「此処にいるんだな・・・。では・・・。」

ドラパンがノックをしようとしています。

まろん「此処が司令官室なのね・・・。」

さくら「ほえ～～～～。」

ドラパン「（ノックする）レイン司令官。只今帰りました。ドラパンです～～～。今日はお客様をお連れ致しました～～～。」

老人の声「おかえりなさい。どうぞ。」

ドラパンがドアを開けてはいるとさくらたちも続くように入っていきました。

声の主の老人は灰色の瞳と首まで掛かる髪を持ち、眼鏡をかけた白衣の６０前後の容姿でした。

老人「お帰りドラパンくん。此処まで来るのに随分と大変であったろう。

おや？この子達がキミのお客さんかい？」

ドラパン「はい。
紹介致します。友人のドラえもんと彼の妹のドラミ。次に過去の世界から来た・・・。」
さくら「木之本　桜です。”さくら”って呼んでください。」
まろん「日下部　まろんです。私達、未来に潜む悪魔を封印しにこの時代に来ました。」
老人「私は聖なる秘密組織・セイント・ウォーリアの司令官・レイン・ウォーティー・フォンティーヌ。この時代の悪魔が遂に過去の世界に手を出したのかね？」
まろん「はい。私は両親を石に変えられてしまい・・・。」
さくら「私は父を石に変えられて、兄を誘拐されてしまいました。」
ドラミ「そして私達は雇い主の息子の野比　セワシさんを魔王復活のための生贄として連れて行かれてしまいました。」
ドラパン「そのうえ、私は大事な友のミミミを生贄として連れて行かれてしまったのです・・・。」
レイン「なんということだ・・・。人間の中で最も美しい心を持つ１０代の人間の子供達を誘拐するとは怪しからん奴らだ。それで犯人の名前とか特徴とか判るかね？」
ドラパン「名前だけなら判ってます。バラスと名乗る悪魔です。」
レイン「バラスだと・・・？あの逸れ悪魔の生き残りだな・・・。」
まろん「はい。」
レイン「なるほど・・・・。実はな・・・・・。」
その時・・・。
”ドンガラガシャ～～～ン！”
派手な音が遠くから聞こえてきました。
レイン「なんじゃ～～～！？」
ドラパン「格納庫の方からだ！」
まろん&さくら「格納庫？」

ドラパン「さっきの部屋だ。聖獣ロボは普段はあそこで待機してるんだ。」
ドラミ「あの銀の扉がある部屋ね。」
レイン「そうじゃ！まさかあいつらもう此処を嗅ぎつけおったか！？」
さくらたちはダッシュで格納庫に向かいました。格納庫では・・・。

キッド「いでででで・・・・。」
キッドたちが山のように積まれてこけていたのだ。
ドラえもん「キッド！みんな！」
ドラリーニョ「や、やあ・・・。」
ドラえもんやさくらたちはその光景を見てあっけらかんとしています。

22世紀のパリ（後書き）

遂にさくらちゃん達はドラえもんズ達と感動の再会を果たしました。
今回は読みを入れてみました。
それにしても稚空くんや小狼くん達はどうしているのでしょうか？
どうせドラえもんズみたいに山積みになるでしょうね。最後はちょっとドジな場面を見せちゃいましたね。
次回はセイント・ウォーリアのメンバー・及び悪魔達を登場させてあげたいです。
それにしても使い魔の聖獣さん達可愛かったですね。

セイント・ウォーリアと対面（前書き）

今作で悪魔のボス・バラスとその使い魔が登場（ただし、使い魔は台詞はない）します。桃矢くんはレアンと云う堕天使に捕らえられて大変です。やっぱりさくらちゃんやまろんちゃんと戦ってしまうのかもしれませんね。
そうなればさくらちゃんは兄妹の絆を大ボス・バラスによって引き裂かれてしまうのかもしれませんね。
可哀想なさくらちゃん・・・。
それはさておき。
今回はさくらちゃん達がドラえもんズと再会及びセイント・ウォーリアと対面を果たします。セイント・ウォーリアが遂に姿を見せます。
セイント・ウォーリアのメンバーは一体どんな人でしょうね。
あ、そうそう。堕天使三銃士の1人・カンダタという男の人の名前は”蜘蛛の糸”の主人公の名前から取ったものです。
”蜘蛛の糸”と云うのは罪人のカンダタが生きていた頃、蜘蛛を助けてその恩返しを受けてカンダタは蜘蛛の糸を辿って極楽に行こうとしましたが途中で我侭を言ってしまったために地獄に逆戻りしてしまいましたが・・・、別の話ではカンダタは我侭を抑えてそのまま地獄から脱出をしました。
このカンダタと伝説のカンダタとはどういう関係かは何故です。
一応調べてみます。

セイント・ウォーリアと対面

ドラえもんズはドラえもん達の手当てを受けています。
マタドーラ「いててて・・・・。」
ドラえもん「皆大丈夫？」
ドラリーニョ「うん、何とかね。」
ドラメッド「やれやれ。酷い目にあったぞよ。」
まろん「でも、また皆に逢えて嬉しいわ。」
さくら「そうだよ。ドラえもんズにまた会えることがどんなに望んでいたことやら。」
キッド「よくねえよ全くよ~~~！王（ワン）ドラが押しまくるから皆で落っこちまったじゃねえか！」
王（ワン）ドラ「（むっとして）貴方がぐずぐずしているからですよ。キッド。」
キッド「何だとう！」
ジェドーラ「まあまあ。２人とも喧嘩はやめてこれまでの出来事を報告しようよ。」
ドラミ「これまでの出来事って？一体何が起きたの？」
ジェドーラが仲裁に入ったためにキッドと王（ワン）ドラの喧嘩は収まった。
ドラパン「話を聞こう。向こうの時代で何が起きたんだ？」
エド「はい。実はでんな・・・。」
キッドたちはのび太の家で起きたことを話しました。
ドラえもん「え~~~~~！のび太くんまでがー！」
ドラニコフ「がう。」
ドラニコフは頷きました。
ドラミ「なんでのび太さんまで！？」
キッド「それが判らねえんだよ！？あのカンダタっておっさんは一体何者なんだよ！？」

さくらとまろんはちょっと首をかしげて。
さくら「ねえドラちゃん。」
まろん「そののび太くんって、一体誰？」
ドラえもん「セワシくんのご先祖様の中で最も出来の悪い男の子だよ。」
さくら「そういえばケロちゃん言ってたな・・・・？」
ケロちゃんは”ドラえもん”の大ファンです。
まろん「まさか日本でもこんなことが起きるなんて・・・・。」
ドラえもん兄妹「喧嘩しなきゃよかった・・・・。ごめんよ（ね）、のび太くん［さん］・・・。」
ドラえもんとドラミは溜息をつきます。そのとき、壁に掛かってあるテレビジョンが映りレイン司令官が顔を出しました。
レイン「まろんくん、さくらくん。ちょっと司令官室に来てくれ。もちろん君達もだ。」
ドラミ「私たちも？」
さくら「判りました。」
さくら一行（いっこう）はお昼寝している聖獣ロボットを残して司令官室に行きました。

司令官室のレイン司令官はモニターを切ると台の前に立つ白い服を着た5人の若者達に目を向けました。
白いショートヘアで桃色のバンダナを首に巻いた青い瞳の確りものの少年。腰まで掛かる青い長髪でさくらと同じ背丈の水色の瞳を持つ愛らしい少年。白い項を隠すほどの紅のセミショートヘアを桃色の2本のリボンでツインテールにした金色の瞳を持つ赤白い唇のオットリ系の少女。稚空と同じ背丈と金色で稚空と同じ髪型で小狼と同じ形の金色の瞳を持つクリーム色の帽子を被った褐色肌の元気少年。そして腰まで掛かる艶やかな黒い髪を灰色の輪ゴムで纏めた淋しそうな表情の紅の瞳を持つ白い肌の内気な少年。彼らが司令官の前に立っています。

少年Ｉ（白いショートヘア）「まさか、僕たちが出かけている間に時空を超えた救世主が現れるなんて思いもしませんでした。」
少年？（褐色肌）「過去の世界で悪魔たちが暴れているなんてなんという無残な事態に・・・・。」
少年？（青髪）「しかも今回はドラパンさんのお友達ですか・・・。」
レイン司令官「まあ、あのお嬢さんたち以外はな・・・・。」
少年？（黒髪）「今モニターに写っていたあれがあの噂のお嬢さん達ですか・・・？」
黒髪の少年は淋しそうな顔から嬉しい表情に変えました。
少女「私たちはあの少女やロボット達と力を合わせて悪魔達に立ち向かわなければならないのですね・・・。」
レイン「そういうことだよ。フレア。」
フレアと名乗る少女の肩を黒髪の少年が抱きます。肩を抱かれたとたんに安心して微笑みました。

司令官室の前のさくらたちはドアをノックしようとしています。
さくら「失礼します。司令官。」
レイン「どうぞ。」
さくらたちは司令官室に入りました。
レイン「司令官。すまんな君たち、急に呼び出したりして・・・。」
まろん「いいえ。」
レイン「ところで今の騒ぎはなんだったんじゃ？」
ドラえもん「そうでした。ご紹介します。僕の仲間のドラえもんズです。右からドラ・ザ・キッドとその相棒のエド、王（ワン）ドラ、ドラニコフ、ドラメッド？世、エル・マタドーラ、ドラリーニョ、そしてジェドーラです。」
ドラえもんは横に行くとドラえもんズを紹介しました。
ドラえもんズ「宜しく。」

そしてさっきの騒ぎのことを話しました。
レイン「納得じゃ・・・。あ、そうそう。君たちにも紹介しておかなければいけなかったな・・・。」
レイン司令官は5人の若者に挨拶するように勧めます。
レイン司令官「彼らは私の部下じゃ。」
ドラミ「この人たちが？」
ドラパン「そうだ。おっと、御前達に例の翻訳こんにゃくは食べさせてはいなかったな。」
ドラパンはシルクハットからこんにゃくを取り出した。
さくら「うえ～～～。さくらこんにゃくは駄目だよ～～～～。でも、一口だけなら・・・。」
さくらは恐々ながら翻訳こんにゃくを一欠けらを口に含め齧ってみました。味はとても美味であったためにさくらはその味を感じ取れました。まろんたちも翻訳こんにゃくを食べました。
さくら「初めまして。私、２０世紀末からタイムスリップしてきた星のカードキャプター・木之本　さくらです。」
まろん「同じく、タイムスリップしてきた神風怪盗のジャンヌこと日下部　まろんです。」
少年Ｉ「初めまして、僕はウィンディ・白・金（ハクキム）。彼女は従姉のフレア・赤・金（セキキム）。」
フレア「宜しくね。あの子達のことはごめんなさいね。」
ドラえもん「いえ、そんな。」
少年？「僕はアクア・ブルー・フォンティーヌ。司令官の孫です。」
少年？「おいらは、ライトニング・ジョーヌ・リード。宜しくな。」
ライトニングは片手の親指を立ててウィンクします。
少年？「俺は・・・、アーシー・黒戸（くろと）・ヴァン・ミャン・・・。」
アーシーは恥ずかしそうに握手を求めます。さくらは？と思いつつも握手をします。

ドラえもん「僕、ドラえもんです。この子は妹のドラミです。」
ドラミ「初めまして。悪魔達に浚われたセワシさん達や石にされたのび太さん達を救うために貴方方を頼って此処に参りました。」
ウィンディ「そのことなら司令官から聞いてるよ。実はこっちも困ったことがあるんだ。」
ドラえもんズ「どういうことなんだ？」
レイン「うむ。実はな。」
レイン司令官はここでも困ったことを話そうとします。

魔界では王座に腰を掛けた少年が膝の上で寝静まっている黒猫を撫でながら畏まったような仕草をする3人の堕天使達を見下ろしています。
少年「我はバラス。全てを魔に染めるために、魔王様の復活を行う逸れ悪魔。
わが忠実な部下よ。」
レアン「レアン・フルーレ、此処に。」
シオン「シオン・アーチェリー、此処に。」
カンダタ「カンダタ・フユヒ、此処に。」
堕天使「我ら、悪魔・バラス様の僕・堕天使三銃士。此処に集う。」
3人はバラスに頭を下げました。
バラス「良くぞ此処に集まってくれた。我が部下達よ。」
シオン「はは、ご命令通り。２０世紀末の人間共を全て石化しました。ですが、香港でシンドバッドと名乗る少年と小狼と名乗る少年は逃してしまいました。」
バラス「そうか。もしかしたら彼らはジャンヌやさくらととやらを追ってフランス
カンダタ「私めは日本でのび太と名乗る少年を石化しました。しかし、その後ドラえもんズと名乗る狸ロボットの集団に会いました。」

バラス「ドラえもんズ？聞いたことない名だな。」
レアン「全くだわ。もしかしたらあのお嬢さん達の仲間かもしれないわ。」
シオン「全くだ。魔王様はあの狸共にもやられたからな・・・。」
カンダタ「ところでレアンは如何だった？」
レアン「私はまろんの両親とさくらと云うお嬢さんのお父様を石化致しました。途中でその狸ちゃん達の3匹に会いましたが。それから後お土産を持ってまいりました。」
レアンは指を振るうと上空から未だ気を失っている桃矢が舞い降りてきました。桃矢はレアンの腕の中に収まりました。
レアン「命令通り、木之本　桃矢を捕獲しました。」
バラスは手を振るうと念力で桃矢をレアンから受け取りました。
バラス「おう。確かに・・・・。間違いない。木之本桃矢だ・・・。」
バラスは桃矢を見て微笑みました。

セイント・ウォーリアと対面（後書き）

そういえば、今回はまだフィンちゃん達と再会は果たしていませんでしたね。一体、如何しているんでしょうか？途中で迷子になっていなければ善いんですけどね・・・。

何せ、フィンちゃんやケロちゃんはオドジですからね。

次回はセワシくんとミミミちゃんが登場します。２人ともまだ１０代前半の子供ですからね。魔王の生贄に選ばれるのは当たり前ですよね。次回はジャックの擬人化さんを登場させたいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4611s/

ザ・ドラえもんズ　時空を超えた聖なる少女達

2011年11月17日19時53分発行